

<巻頭言>



新年のご挨拶

橋 本 徳 昭*

会員の皆様方、新年明けましておめでとうございます。ご家族共々、佳き新年をお迎えになったこととお慶び申し上げます。

昨年2月末の総会で会長にご推挙頂いて、早くも約1年が経ち、ここに平成27年の新年を迎えることとなりました。

当会議は会計年度を1月から12月と暦年と同じにしている関係から、新年度もまた始まった勘定になります。平成26年度を振り返ってみますと、大きな行事として、まずは6月の ICOLD 第82回バリ年次例会を挙げることになりました。会員各位のご理解、ご協力の下、79名という開催国インドネシアを除くと最大の参加国となったわけですが、各技術委員会やシンポジウムで活躍頂いた会員の方々ご苦労様でした。また、JCOLDの展示にあたっては、多くの会員の方々がWGを作って、長期に亘り企画・検討をして頂き、我が国の誇る台形CSGダム技術とダム再生を広く海外に情報発信できたことは、今回の例会における最大の収穫であったと思っています。これがキックとなって、エジプト国から Wa-di(枯れ川)のFlash Flood対策のために台形CSGダム技術の適用を考えたいとして、11月には両国の大ダム会議でMOUを締結し、柳川副会長以下のミッションが現地調査するまでに至ったことは、我が国の高度な技術の移転として喜ばしい動きであると考えております。本年も6月12日から19日にかけてノルウェイのスタバンゲルで第83回年次例会第25回大会が開催されます。フィヨルドとオーロラの国、電力のほとんどすべてを水力で賄っている国であります。是非、バリ例会同様に、多くの会員の皆さんにご参加頂き、我が国のダム技術ここにありと有意義な2015スタバンゲルにしたいと存じますので、奮ってご参加いただきますようお願い申し上げます。

次に、フランス大ダム会議からの要請で、一昨年来行っているダムの耐震解析に関する技術交流がさらに活発化し、昨年はJCOLDから5名がフランス大ダム会議CFBRから招待される形でフランスを訪問し、現地でセミナーやワークショップを行っています。これも本年はCFBRのミッションが訪日する予定であり、益々交流が深化するものと考えられます。日本の進んだダム耐震技術を如何に我々にとって価値ある姿で情報発信できるかの試金石であり、JCOLDとして今一步組織的な活動で受け止めていくべき活動では

* 一般社団法人日本大ダム会議 会長

と思い巡らせているところです。

また、昨年10月には EADC が韓国で開催され、これまた会員各位の多大なご協力を頂き、21名のミッションとなりました。ご参加頂いた皆さんに紙上をお借りして御礼申し上げます。2年に一度の本会合は次回2016年秋に札幌で開催する旨現地で表明して賛同されています。本年はその準備に取り掛からなければならない年でもあります。関係者の方々、とりわけ北海道の会員各位にはご協力頂きたいことが多々出てまいることと存じますが、何卒宜しくご理解の程お願い申し上げます。

以上、国際交流の話ばかりが昨年来のビッグイベントのような扱いとなってしまいました。国内での地道な活動も当然多くあったわけですが、新年に事寄せて、若干華々しい話題だけを拾わせて頂いた次第です。

建設業界は人手不足など多くの課題を抱えつつも、東日本大震災に端を発した趣きの自然災害に強いインフラ整備や2020年東京オリンピックに向けた首都圏整備など久々に活況を呈しているようで、誠にご同慶の至りであります。しかしながら、少し過去を振り返ってみますと、インフラは既に充分過ぎるほど整備されているとの世論の下に、やれ「事業仕分けだ、ダムはムダだ」だの言い募られ、前途ある若者が土木分野に進まない風潮であったことも事実であります。「歴史は繰り返す」という言葉もあるように、活況を呈し始めた昨今の状況がいつまた暗転するや分からないポピュリズムに浮かぶ不透明な時代に、長期的な視野で公益を担っているダムの世界に携わる者として、これまで以上に、将来に向けた一過性で無い確かな活動を行い、国内外に適宜発信していくことが重要になってきていると考えさせられた昨年でありました。この歩みをさらに本年も拡張していけるよう、会員皆さん方のご協力を得て、共に進んで参りたいと思いますので、何卒本年も日本大ダム会議の活動にご理解、ご協力の程宜しくお願い申し上げます。